4/13/2007

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊

S.　Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．　テーマ：キリスト教思想における社会・政治・民族（１）

現代世界において宗教は民族とともに、しばしば深刻な対立要因の一つと見なされている。たとえば、キリスト教とイスラームとの対立、あるいは一神教と多神教との対立などといった話題は、日本でも広範に見られるものである。こうした対立図式自体が有する問題性は批判的な検討を要するものではあるが、キリスト教あるいはキリスト教思想がまさにこうした文脈で問われていること、またここに現代キリスト教思想の主要なテーマの一つがあることは否定できない。そこで、本特殊講義においても、こうした問題状況を念頭に置いて、とくに、近代／ポスト近代、アジア・東アジアといった視点に留意しつつ、キリスト教思想における社会、政治、民族に関わる諸問題を取り上げることにしたい。本年度扱われる問題は以下の通りである。

１．現代キリスト教思想における問題状況の確認。この 100 年あまりのキリスト教神学の動向を、社会、政治、民族の問題との関わりで整理する。とくに、バルト、Ｒ・ニーバー、モルトマン、解放の神学。
２．現代の政治哲学から、とくに、正義と公共に関わる議論を取り上げ、キリスト教思想との関わりで考察する。アーレント、ハーバーマス、ロールズ、リクールなど。
３．ティリッヒの宗教社会主義論を中心に、ティリッヒの政治哲学・政治神学の内容（正義、力、権力、愛、大衆、民族、全体主義）と特質を解明し、キリスト教思想における社会理論の方向性を展望する。

Ｂ．　講義の意図

＜昨年度の講義：「自然の諸問題から公共性へ－キリスト教思想の視点から－」＞

１　　自然神学から公共神学へ

１ 環境論とキリスト教思想－環境・経済・政治－

１－１：環境論と聖書解釈－創造論から終末論へ－

（１）論争の舞台としての創造論
（２）創造論から終末論へ
（３）環境論にとっての聖書の意義

１－２：経済的政治的な問いとしての環境論

（１）キリスト教思想と環境論との積極的な結びつきとその条件
（２）環境論と政治・経済とのリンク　→　キリスト教的な公共性論の構築
（３）John B. Cobb, Jr.: Christianity, Economics, and Ecology
（４）Larry Rasmussen,　Global Eco-Justice: The Church’s Mission in Urban Society

２　生命論とキリスト教思想－生命・経済・政治－
２－１：脳死論、そしてクローニング
（１）生命倫理の諸問題
（２）生の次元論から脳死論の宗教的次元へ
（３）クローニング
２－２：自己決定論と共同体論

３　コミュニケーション論としての自然神学
３－１：自然神学とは何か
（１）通俗的な理解に対して
（２）ブルトマンの自然神学論
（３）自然神学の歴史
（４）広義と狭義の自然神学
３－２：コミュニケーション合理性と自然神学
（１）自然神学は何を意図しているのか－証明？　あるいは何？－
（２）コミュニケーション的行為としての自然神学
（３）コミュニケーション合理性に向けて

４ 自然神学から公共神学へ
４－１：コミュニケーション論の拡張の可能性
（１）コミュニケーションの可能性と現実性
（２）弁証としての自然神学　→　弁証神学を手がかりに
（３）ティリッヒの二つのモデル
（４）挑戦としての弁証－論破する弁証－
４－２：まとめと展望
（１）まとめ－自然の神学あるいは自然神学から公共性へ－
＜命題１＞
　自然・科学をめぐる現代のキリスト教思想の問題状況（生命と環境をめぐる倫理的な諸問題）は、公共性の議論への展開を要求する。
＜命題２＞
　自然神学（あるいは「自然」）は広義と狭義の二つの意味を有しており、信仰共同体内部と外部とにおけるコミュニケーションの合理性を担ってきた。このコミュニケーション合理性は、キリスト教と諸宗教との間、あるりは神学と諸科学との間における関係構築の基盤であり、公共性の問題として解することができる。自然神学は公共神学として再解釈できる。

（２）前提の共有のないところではどうなるか
１．言説の役割と限界
　　言説・合理性だけでは信仰は生まれない

より包括的な議論が必要になる

しかし、言説は信仰の逸脱への批判性の基盤となりうる

２．批判原理と形成原理

公共性の生成という問題

形成原理の問題

（３）前提を共有しない人々との討論

「平和」の場合：

1.平和主義１

抽象的、サークル内的

2.前提を共有しない立場からの問い

家族を殺されたらどうする？

ミサイルを発射されたらどうする？

3.この問いを手がかりにコミュニケーションを作り上げる、そして弁証する

4.平和主義２

（４）John Hick, *Interpretation of Religion*

Introduction of 1st Edition

a religious interpretation of religion（not confessional）

the view of religion from within / from without

purely human phenomenon　　anthropological, sociological, psychological

（1）

religion as a family-resemblance concept

definitional strategies

as forming a complex continuum of resemblances and differences analogous to those found within a family

Paul Tillich's concept of 'ultimate concern'　（3-5）

cf. functional

The Soteriological Character of Post-Axial Religion

In all these forms the ultimate, the divine, the Real, is that which makes possible a transformation of our present existence,

unlearning our habitual ego-centredness and becoming a conscious and accepting part of the endlessly interacting flow of life　（33）

Salvation/Liberation as Human Transformation

Introduction of 2nd Edition

the religious ambiguity of the universe. the fact that it can be understood and experienced both religiously and naturalistically　（xvii）

it is entirely rational for those who experience religiously to trust their religious experience and to base their living and believing on it.

the critical trust principle (xviii)

this is accepted within each of the greatest post-axial traditions on behalf of its own adherents. But if the principle is sound, it must apply to the other traditions as well, and it thereby validates a plurality of incompatible religious belief-systems. (xix)

The hypothesis is that there is an ultimate reality, which I refer to as the Real.

which is in itself transcategorial (ineffable), beyond the range of our human conceptional systems, but whose universal presence is humanly experienced in the various forms made possible by our conceptual-linguistic systems and spiritual practices.

all awareness of our environment is interpretative, a form of experiencing-as. (xix)

２　現代宗教論

１　宗教とは何か

１－１：古典的宗教哲学とその限界

１－２：意味論から宗教論へ

１－３：究極的関心・深みの次元・自己超越性

２　近代世界と宗教－なぜ宗教か－

２－１：フォイエルバッハ問題

２－２：現代神学とフォイエルバッハ

２－３：宗教的実在論

３　宗教的多元性の諸問題

３－１：宗教の神学

「複数の宗教が存在する中で、なぜこの宗教なのか」

３－２：ヒックと宗教多元主義

＜まとめと展望＞

１．三つの問いとそれに対する答え

①宗教とは何か

宗教の実体概念から機能概念へ：意味世界の根拠付け機能

宗教の広義と狭義の概念規定：意味根拠の遍在性と特定の仕方での象徴化

人間存在は本質的に宗教的であるが、その現実形態においては、伝統や状況に制約されつつ、具体化される。

②現代においてなぜ宗教なのか、宗教批判にどう答えるか

争点：近代の自律的理性と伝統的宗教との関係

宗教の無意味化あるいは有害性という議論自体が特定の意味根拠からなされている

人間が意味的存在者であるかぎり広義の宗教は存在し続け、狭義の宗教はそ

の具体的な象徴の主要な源泉としての存在意味を保持する
宗教だけでなく精神的な事柄全般への無関心という状況について、どのように考えるか。可能性としての広義の宗教が可能性にとどまり続けるのが通常の状態となるということは、いかなる事態か

③複数の宗教の存在していることをどう理解するのか、どの宗教なのか
現代世界の多元化とグローバル化という背景
宗教的多元性は人間にとって歴史的現実であるのか、あるいは過渡的現象か
宗教的多元性を前提に、どのような宗教思想を展開するのか、対話、共生
宗教の価値評価は可能か、基準は
自由な選択と運命的な所属

２．三つの問題の相互連関（問題群）
いずれの問いも、他の二つの問いと連関している。新たに本格的な理論化が求められている
古典的にはシュライアマハーにおいて、そしてティリッヒ、ヒックにおいて、三つの問題の相互連関は確認できる。

３．宗教研究基礎論の具体化　→　既存の理論を越える理論構築には、「人間」をめぐる広範な諸理論を視野に入れていることが必要
諸科学の中における宗教学

４．例１：「宗教と科学」の関係論
宗教と科学との相互関係を問うための基礎論（哲学、形而上学）
思想史（宗教思想史と科学史）
実践論：倫理的諸問題のよる理論の有効性の検証

５．例２：アジア・日本の宗教研究
アジアの宗教状況の理解と分析を可能にする宗教理論の構築
儒教や道教の宗教性、宗教的伝統の多層構造
スピリチュアルなもの・霊的なものと宗教との関わり
伊藤雅之他編　『スピリチュアリティの社会学　現代世界の宗教性の探求』現代思想社　2004 年

６．宗教研究のために何が必要か（展望にかえて）
・具体的な個別的文脈と一般化との往復
具体的な現場を視野に入れること（具体性）、普遍化の努力
・相互主観的な理論構築へ　→　公共性の問題、個人の思索と研究グループへの参加
・人間への関心、知的好奇心

＜文献＞

1.芦名定道　「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、Journal of the Institute of Asian Area Studies, 釜山外国語大学　アジア地域研究所　2004 年、1-18 頁
2.稲垣久和　『宗教と公共哲学　生活世界のスピリチュアリティ』東京大学出版会　2004年
3.星川啓慈他　『現代世界と宗教の課題　宗教間対話と公共哲学』蒼天社出版　2005年

（なお、星川編の『現代世界と宗教の課題　宗教間対話と公共哲学』の内容に関しては、次の書評を参照。

芦名定道　「文献紹介：星川啓慈他　『現代世界と宗教の課題　宗教間対話と公共哲学』蒼天社出版」（http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14D15.pdf））

4.稲垣久和・金泰昌編　『公共哲学16　宗教から考える公共性』東京大学出版会　2006年
5.安彦一恵・谷本光男編『公共性の哲学を学ぶ人のために』世界思想社　2004年
6.阿部美哉　『政教分離　日本とアメリカにみる宗教の政治性』サイマル出版　1989年
7.山脇直司　『公共哲学とは何か』ちくま新書　2004年

Ｃ．講義の予定

オリエンテーション	4/13
導入１　宗教と民族	4/20
導入２　宗教言語とメタファー	4/27
導入３　家族・民族のメタファー化	5/11
１　キリスト教思想と政治（前期）	
１　近代世界とキリスト教	5/18
２　民主主義とキリスト教	5/25, 6/1, 8, 15
３　ティリッヒ『組織神学』の政治論	6/22, 29, 6
まとめと展望	7/13
２　宗教社会主義の射程（後期）	
後期オリエンテーション	10/5
１　政治神学の可能性	10/26, 11/2, 9
２　正義と愛	11/16, 23, 30
３　宗教的社会主義の射程	12/7, 14
Exkurs　現代キリスト教思想における宗教と科学	10/12

Ｄ．受講の注意

１．単位
　年度末のレポート（後日、説明）
２．関連の演習と研究会
　モルトマン演習（金・２）
　「キリスト教思想研究の現在」演習・研究会（月・３）
　「アジアと宗教的多元性」研究会（月一回）
　「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会（本年度から。火・５？）
　宗教倫理学会研究会（月一回）